

JA食農教育の 成果と価値を探る(前編)

～JAレーク滋賀 栗東地区「わんぱくスクール」～

小川理恵

一般社団法人 日本協同組合連携機構 基礎研究部 主席研究員

全国のJAの約8割が実施している「子ども農業体験」(JA全中調べ)。コロナ禍によって中止や規模縮小も相次いだが、収束後には以前にも増して対面による五感を駆使したJA食農教育のニーズが高まってくるだろう。JAによる食農教育は、どのような成果や価値をもたらすのか——。地域に根差した食農教育に取り組むJAの事例を基に2回にわたって探る。



JAレーク滋賀の第2回わんぱくスクールでの稲刈り体験。収穫した米は、親子で自作した米袋に入れて、1家族10キロずつ持ち帰り、残りの米の一部は地域の子ども食堂へ寄付した

■ 「命」をはぐくむ食農教育

日本の子どもの幸福度は、先進国のなかで最低レベルにある。国連児童基金(ユニセフ)が、先進38カ国を調査した2020年度報告書によると、日本の子どもの「身体的健康」は1位だったが、「精神的幸福度」は37位と、両者の間に大きな差が出た。精神的幸福度が低いのは、日々の暮らしに幸せを感じられない子どもが多く、自殺率も高いことが主な要因だという。



靴下で田んぼに入って親子での田植え体験

こうした背景のもと、2023年4月1日に「こども家庭庁」が創設された。こども家庭庁では、①ライフステージごとに希望が持てる社会を目指す、②全ての子どもに安全・安心な環境を提供する、③全ての子どもの健やかな成長を保障する、の3つを取り組みの柱に挙げる。さらに同日に施行された「こども基本法」では、「こどもまんなか社会」が謳われ、社会全体で子どもに関する施策に取り組むことが目標として掲げられた。

このような状況のなか、地域の食と農を支える役割を担うJAが、「命」をはぐくみ、その大切さを子どもたちに体感してもらう「食農教育」に取り組むことが、より一層重要度を増しつつある。

■ JAレーク滋賀栗東地区の「わんぱくスクール」

JAレーク滋賀は、2021(令和3)年4月に、県内8つのJAが合併し誕生した。わんぱくスクールは2007(平成19)年に合併前の旧JA栗東市の時にスタートしたものであり、現在もJAレーク滋賀栗東地区(以降、同JAとする)で継続して実施している。

食農教育に取り組む理由について、同JAの山本隆詞常務は「農家組合員の高齢化とそれに伴う兼業化により、地域住民が農業から離れつつあります。そのような状況だからこそ、小さいころから農に接し『食と農の重要さ』を学ぶ『食農教育』を通して、子どもたちの豊かな心をはぐくむことはJAの使命だと思っています」と話す。

わんぱくスクールの対象者は栗東市内の小学生(1~6年生)と保護者である。募集は市の学校教育課を通じ、市内全9つの小学校でチラシを配布して行う。令和4年度には51組の応募があり、抽選で、児童21名・15家族が選ばれた。参加者の内訳は、組合員家族が1割、員外が9割とほとんどが員外である。

コロナ以前の令和元年度までは、子ども(小学3~6年生)のみを対象としてい



令和4年度から親子参加に変更し、親子で農業理解を深める場となっている

だが、令和4年度(令和2、3年度はコロナで休校)から親子参加に変更した。農作業などの体験において、子どもだけだと密になりやすいが、保護者がいることで、感染対策が徹底できるからだ。さらに、孤食などの問題がクローズアップされるなか、親世代にも食と農の大切さを考える機会を持ってもらいたい、というJA側の思いもあった。

わんぱくスクールは、コロナ以前は年間8回程度のカリキュラムを実施していたが、令和4年度からは、コロナのリスクを鑑み、年間4回のプログラムに変更している。わんぱくスクールの事務局を務めるのは同JAの栗東管理課であり、そこに栗東地区担当常務、栗東地区統括本部部長、営農経済センター長、営農購買課長、営農指導員が加わった「わんぱくスクール運営部会」において、全体の企画を決定している。

■ 農業体験と座学の両面で農業を楽しく理解

わんぱくスクールの一番の特徴は、農業体験と、「ちゃぐりんの時間」などの座学がセットになっていることであり、それは回数や対象が変化しても、同JAが一貫してこだわっている点だ。

農業体験は、JAの地区統括本部に隣接した、JAが借り受けている専用の田んぼ・圃場で行われる。指揮を執るのは営農購買課の営農指導員で、時には青壮年部部員の力を借りながら、子どもたちの目線に立って、丁寧に作業方法を伝授する。営農指導員や青壮年部部員が先導することで、専門家として質問に答えることができ、保護者に安心感と満足感を与えている。

また、田植え・稲刈り、イモ類の定植・収穫などのメイン作業だけでなく、草引き、コンバインの見学など、農業の大変なところも体験できるよう組み立てられていることも、わんぱくスクールの特徴である。農業の本当の姿に触れることで、一步も二歩も農業に近づくことができるからだ。

田植えでは長靴ではなく、靴下やはだしで田んぼに入り、泥の感触をじかに感じてもらう。子どもたちからは「田んぼの中は意外とあたたかい!」「泥は気持ち悪い」など素直な声が上がった。

一方「ちゃぐりんの時間」などの座学は、農業体験の前か後のどちらかに、JA2階の農業研修センターに場所を移して行われる。座学も同時に実施しているのは、農作業を単なる「体験」だけで終わらせないためだ。例えばマルチ張りをした日には、なぜマルチが必要なのか、管理課職員が、お手製のパワーポイントスライドを用いてわかりやすく説明する。「お米の勉強会」では、自分たちが植えた苗の生育記録を共有し、田植えから米を収穫するまでの作業の一つひとつの理由や方法を丹念に学ぶ。

子どもたちを飽きさせないための工夫にも気を配っている。「お米には花が咲くと思う?」「サツマイモは植物のどの部分?」など、伝えたいことをクイズにして、三択形式で問いかける。クイズは、子どもはもちろんのこと、食や農について楽しく理解できると保護者からも好評である。



「お米には花が咲くと思う?」というクイズに元気よく手を挙げる子どもたち。答えは「数時間だけ咲く」

■ コロナ禍のひと工夫——料理教室の代替で「災害飯づくり」

コロナ以前は、定植から収穫、収穫した野菜などを使った料理まで、一貫して体験できるプログラムを実施しており、それが人気の要因の一つでもあった。ところがコロナにより、調理室などの狭い空間で、全員で料理をすることが難しくなった。そこで、ボーイスカウト経験のある、栗東管理課の角田和弘課長のアイデアで取り組んだのが、特別な調理器具がなくても簡単にできる「災害飯」づくりである。

表 令和4年度わんぱくスクールカリキュラム

第1回	開校式・サツマイモとサトイモの定植・田植え体験
第2回	ちゃぐりんの時間(お米について)・お米の勉強会&米袋制作・サツマイモとサトイモの観察と草引き・稲刈り体験
第3回	子ども食堂へお米の贈呈式・ちゃぐりんの時間(サツマイモについて)・防災勉強会・災害飯づくり・サツマイモ収穫体験・災害飯試食
第4回	修了式・ちゃぐりんの時間(サトイモについて)・終了記念品づくり(カレンダー)・サトイモ収穫体験・コスモス畑見学

出典：JA提供の資料をもとに筆者作成

「まずは座学で防災の勉強会を行い、栗東市で災害が起きたらどうなるかを皆で考えました。そうした下地のもと『災害飯づくり』を体験したのでとても盛り上がりました。『自分たちで収穫したものを料理したい』という参加者の希望も、密を避けながらうまくかなえることができました。自分たちで栽培し、収穫したイモと米を使って、サツマイモご飯の災害飯を調理しましたが、大変好評でした」(角田課長)。



災害飯づくり。ビニール袋に米・サツマイモ・水を入れ、お湯で蒸すだけで美味しいサツマイモご飯が炊きあがる

■ 子どもや保護者だけでなく J A 職員にも大きな成果が

このように、同 J A では、コロナ禍をあらゆる工夫で乗り切りながら、平成 19 年度から令和 4 年度まで、全 14 回のわんぱくスクールを開催してきた。これまでの延べ参加者は、子ども 524 人・15 家族(家族数は令和 4 年度のみ)に上る。参加者にはリピーター希望者も多く、現在実施中の令和 5 年度わんぱくスクールの応募時には、令和 4 年度の参加家族のうち 6 家族から参加希望があった(抽選の結果、落選)。

このように、すでに地域にしっかりと根付いているわんぱくスクールは、数えきれないほどの成果を生んでいる。

まずは子どもたちへの影響だ。多くの保護者から「子どもがご飯をおいしいと食べるようになった」という声が聞かれ、農業体験や座学を通じて、子どもたちのなかに、食を大切に思う気持ちが芽生えていることがわかる。また、1 年間のスクールを通じて、子ども同士が仲間意識を持ち、上級生が下級生の面倒を見る姿も見られるそうだ。わんぱくスクールが社会性を身に付ける好機になっているといえる。

栗東市内の中学では企業の職場体験の授業があるが、あるわんぱくスクールの修了生が体験先として同 J A を選択し、今では同 J A の職員として活躍しているそうだ。

影響は保護者側にもある。保護者のアンケートでは「家族で食や農について話すきっかけとなり会話が増えた」「栗東市の特産物に興味を湧くようになった」「農作物がどのように作られてきたのか買い物時に気にするようになった」といった感想が多数寄せられた。栗東管理課の籾内かおる課長補佐と宮田加奈子係長は「家庭の食事は親御さんにお任せするしかありません。わんぱくスクールを通じ

て、家族みんなで食卓を囲むことの大切さを伝えることができたと思います」と声をそろえる。

いっぽう、JAの職員にも好影響が出ているようだ。わんぱくスクールは、担当部署だけでなく、金融など他部署の職員も参加することが伝統となっている。非農家出身の職員が増えるなか、一度でも農業を体験することで、臆することなく組合員と会話できるようになる。「子ども慣れ」したことで、組合員宅を訪ねたとき、子どもとの何気ないやりとりから、父母や祖父母などとの会話の糸口をつかめるようになった職員もいる。また、普段はぶっきらぼうに感じる職員が、わんぱくスクールで子どもたちに囲まれ、生き生きとしている姿が見られるなど、職員の隠れたよい面を発見し、驚くこともあるそうだ。

このようにわんぱくスクールは、子どもたち、保護者、JA職員と、「三方よし」の成果を上げているといえる。

「これまでわんぱくスクールに関わってきた多くの子どもたちやその家族に、横のつながりができつつあります。わんぱくスクールは、地域のむすびつきのきっかけづくりにもなっているのです。JAを身近に感じてもらいながら、地域の輪がどんどん広がっていくことを願っています」(統括本部 作田晃部長)。

コロナが収束しつつあることを受け、今年度からは、JA女性部員の力を借り、料理体験も再開する。再生したわんぱくスクールには今年もまたたくさんの笑顔が集うだろう。



取材に応じてくれたJAレーク滋賀栗東地区統括本部の皆さん。前列左から、山本常務、作田部長。後列左から、角田課長、宮田係長、藪内課長補佐